

ダニエルの書 - 番号172

ファティマの影：カトリック教会の預言的な幻視の背後にあるサタンの影響を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-04-02

ファティマの預言は、サタンがキリストを装うときにカトリック教会がその組織を彼に明け渡すよう仕向けるための、サタンによる準備工作であった。というのも、それは「サタンの力の傑作—彼が自らの意志どおりに地上を支配するために王座に就こうとする努力の記念碑」であるからだ。サタンが奇跡を行う能力を信じようとしないうちに、カトリックを導くうえでのファティマの役割を明らかにする預言的証言から益を受けようとしないうちは、自ら欺かれる立場に身を置いている。ファティマの預言は、カトリック内部の闘争と、無神論に対するカトリックの戦いを扱っていた。

無神論に対するカトリックの戦いは、ダニエル書11章40節の主題である。その闘争の図解は、40節において1798年に始まった。それは、南の王であるナポレオンが1798年に教皇を捕囚とした戦いをもって始まり、そしてその節のうちにある証言は、1989年に北の王が南の王を一掃することをもって終わる。その歴史の範囲内（1798年から1989年まで）において、1917年および1918年の二人の敵対者は、それぞれ預言的象徴をもって示されており、その象徴は、節全体の主題を保持しつつ、両者の証言を結び合わせている。ファティマの預言は疑いなくサタンの預言であるが、それは神の預言の御言葉の主題であり、それゆえ正しく理解されるべき歴史なのである。

「この時代において魂にとって唯一の安全は、一步進むごとに、『主はそのしもべに何と言われるのか』と問いただすことである。主の御言葉はとこしえに立つ。聖書は私たちの道しるべであり、人間の知恵に頼って、有限な人間の主張を神の真理として受け入れるのではなく、確かな預言の言葉を探り求めるべきである。神は語られ、その御言葉は確かであり、私たちは『主はこう仰せられる』という御言葉の上に信仰を置かなければならない。神は、私たちの周囲で起こっている出来事を学び、それを御言葉にある予言と比較して、私たちが終わりの日に生きていることを理解するよう望んでおられる。私たちには聖書が必要であり、その中に何が書かれているのかを知る必要がある。熱心に預言を学ぶ者は、真理の明確な啓示によって報われる。なぜなら、イエスは『あなたの御言葉は真理です』と言われたからである。」サインズ・オブ・ザ・タイムズ、1894年10月1日。

ダニエル書十一章十三節から十五節に表されている第三の代理戦争において、幻を確立するために自らを高く上げる勢力が導入される。この節は紀元前200年に成就した。その時、「ローマ人は若きエジプト王のために干渉し」、また「アンティオコスとフィリッポスによって企てられた滅びから彼を守るべきであると決定した」。この節と紀元前200年の歴史は、日曜法の直前、弱体化したプーチンの後継者を防衛するという前提のもと、合衆国と国際連合（セレウコスとマケドニアのフィリッポス）がロシアの領土を奪い、それを相互の利益のために分割しようと決定している時に、教皇制ローマ（ツロの淫婦

)がその音楽を奏し始め、地の王たちと姦淫を行うために進み出始めることを示している。

西暦533年とユスティニアヌスの勅令は、黙示録第13章2節に予言的に示されているとおりに、そのとき繰り返される。そこでは、竜（異教ローマ）が教皇権に三つのものを与えることが明らかにされている。

私が見た獣は豹のようで、その足は熊の足のよう、その口は獅子の口のようであった。竜は自分の力と位と大いなる権威をその獣に与えた。黙示録 13:2。

異教ローマの竜は、西暦330年にコンスタンティヌスが首都をコンスタンティノープルへ移したとき、その「座」（ローマ市）を教皇制に与えた。クローヴィスは496年からその軍事的「力」を教皇制に与え、さらに533年にはユスティニアヌスはその民政上の「権威」を教皇制に与えた。五年後、異教ローマはダニエル書11章16節、31節、41節に示されているとおりに、教皇制を王座に就かせた。アメリカ合衆国が第三の代理戦争に勝利するとき、教皇制はファティマの預言の主題であるロシアの共産主義勢力を打ち破ることになる。これらの代理戦争には真理の刻印がある。というのも、その三つの戦いはすべて、教皇の代理軍によって遂行されるからである。

最初および最後の教皇権の代理軍は、合衆国（背教したプロテスタンティズム）である。中間の代理軍はウクライナのナチスであり、彼らはまた、第二次世界大戦において共産主義ロシアに対するカトリックの代理軍でもあった。世界大戦は三つあり、代理戦争も三つある。世界大戦と代理戦争の双方における第二の戦争は、ナチズムであった。現在のウクライナでの戦争は、ラフィアの戦いにおいて最初に第十一節と第十二節を成就した国境線の戦争である。ウクライナでの戦争は、いまや、第三の禍におけるイスラムの三度の打撃のうち第二の時期の間に遂行されつつあるが、イスラムはその特定の戦争には関与していない。

最初の打撃は、2001年9月11日に霊的な栄えある地に対して加えられたのであり、三つの打撃の最後のものは日曜休業令の時に於いて、再び霊的な栄えある地に対して加えられる。第三の災いにおけるイスラムの三つの打撃の第二は、2023年10月7日に文字どおりの古代の栄えある地に対するものであった。その戦争は、プトレマイオスがラフィアの戦いにおいて勝利を収めたのと全く同じ地域で起こっている。イエスは、終わりの日には戦争と戦争のうわさがあると述べられた。

イエスが言及された戦争は、あらゆる幻の効力が成就するその歴史の中で起こるのであり、その事実を記録したのはエゼキエルであった。その歴史の中には、イスラムの第三の災いの到来、代理戦争の第二および第三の戦い、アメリカ南北戦争の再現、アメリカ独立戦争の再現が表象されている。これらの戦争は十四万四千人の印を押す歴史の期間中に成就し、間もなく到来する日曜法の時に、最後の第三次世界大戦が始まり、第三の災いであるイスラムが諸国をいよいよ激しく怒らせるその時、主は御自身の軍勢を旗印として起こされるのである。

また、あなたがたは戦争や戦争のうわさを聞くことになるだろう。気をつけて、うろたえないようにしなさい。これらはすべて起こらなければならないが、まだ終わりで

はない。民族は民族に、国は国に対して立ち上がり、また、方々で飢饉と疫病と地震が起る。これらはすべて、苦難の始まりである。マタイ 24:6-8。

十四万四千人の封印の時には、神の民の二つの階級は、見る力と聞く力によって特徴づけられる。

だから、わたしは彼らにたとえて語る。彼らは見えても見ず、聞いても聞かず、悟りもしないからである。そして彼らには、こう言われたイザヤの預言が成就している。「あなたがたは聞くには聞くが、悟らない。見るには見るが、認めない。」この民の心は鈍くなり、耳は聞こえにくく、目は閉じてしまった。いつか目で見、耳で聞き、心で悟って立ち返り、わたしが彼らを癒すことがないように。しかし、あなたがたの目は見ているので幸いだ。あなたがたの耳も聞いているので幸いだ。マタイによる福音書 13:13-16。

2001年9月11日に始まったその時期に、イエスは「あなたがたは戦争と戦争のうわさを聞くでしょう」と言われた。ヨハネの黙示録において、ヨハネはキリストの声を聞く者たちを代表している。

私は主の日に御霊にあつて、背後にラッパのような大きな声を聞いた。黙示録 1:10。

彼が聞いた「声」は「ラッパのよう」で、ラッパは戦いの象徴であり、その声は彼の背後から聞こえた。そこで彼は、その声を見ようとして振り向いた。

そして、私に語りかけるその声を見ようとして振り向いた。振り向くと、金の七つの燭台が見えた。七つの燭台の真ん中に、人の子のような方がおられ、足まで届く衣をまとい、胸のあたりに金の帯を締めておられた。その頭と髪は羊毛のように白く、雪のように白かった。目は火の炎のようで、足は炉で精錬されて光り輝く真ちゅうのようであり、声は多くの水のとどろきのようであった。右の手には七つの星を持っておられ、口からは鋭い両刃の剣が出ており、その顔は強く輝く太陽のようであった。私はその方を見たとき、死んだ者のようにその足もとに倒れた。すると彼は右の手を私の上に置き、私に言われた。「恐れるな。わたしは初めであり、終わりである。」ヨハネの黙示録 1:12-17

ヨハネがその声を見ようとして振り向いたときに見たキリストの幻は、ダニエルが第十章で見たのと同じ幻であり、イザヤが第六章で見たのと同じ幻であり、また、パウロが七つの雷の歴史を見たときに見たのと同じ幻であった。

謙遜は心の聖潔と切り離せない。魂が神に近づけば近づくほど、いよいよ完全にへりくだらされ、打ち碎かれる。ヨブはつむじ風の中から主の声を聞いたとき、「私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます」と叫んだ。イザヤが主の栄光を見、ケルビムが「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と叫ぶのを聞いたとき、彼は「わざわざ、私は滅びる！」と叫んだ。聖なる使者の訪れを受けたとき、ダニエルは「私の麗しさは私のうちで朽ちた」と言う。第三の天に引き上げられ、人が口にするのを許されないことばを聞いた後でさえ、パウロは自分のことを「すべての聖徒のうちで最も小さい者よりもさらに小さい者」と語った。イエスの胸にもたれ、その栄光を見た、あの愛されたヨハネでさえ、御使いたちの前に死人のように倒れた。私たちが救い主をいよいよ近く、絶えず仰ぎ見るほど、私たちは自分のうちに是

認してよいものをますます見いだせなくなる。サインズ・オブ・ザ・タイムズ、1887年4月7日

ガブリエルがダニエルのためにその幻を解き明かしたとき、彼はダニエル書第十一章の預言的出来事を示した。それらの出来事は戦争の記述であり、そしてそれらの戦いの表現の中で、「marah」として表される女性形の「mareh」という、変化を引き起こす幻が、ダニエルをキリストのかたちへと変えた。キリストが「戦争や戦争のうわさを聞くことになる」と言われるとき、彼はダニエル書第十一章に示された戦争を指し示しておられる。さらに、御自分のかたちへと見る者を変えるその幻を見るには振り向かなければならない。声はあなたの背後にあるからだ、とも示しておられる。ダニエル書第十一章に表されている戦争は、過去の歴史に起こった戦争の記述である。過去におけるそれらの戦争について聞くことによって、人は今起こっている歴史について教えられる。しかし、それは見る目と聞く耳がある場合に限られる。

エゼキエルが、その幻がもはや先延ばしにされることのない時が来ると記したとき、それは天の聖所に関するエゼキエルの幻と関連しており、そこで彼は、ほかの事柄とともに「輪中の輪」を見た。これをホワイト夫人は、人間の出来事の複雑な相互作用であると見なしている。

ケバル川のほとりで、エゼキエルは北の方から来るかのようなつむじ風を見た。「大きな雲、そして自らを包み込む火があり、そのまわりには輝きがあり、その中からは琥珀のような色が現れていた。」いくつもの車輪が互いに交差し、四つの生き物によって動かされていた。これらすべてのはるか上には「サファイアの石のような外観の御座のかたちがあり、その御座のかたちの上には、人の姿のようなものがあった。」また、「ケルブたちには、その翼の下に人の手の形が見えた。」エゼキエル 1:4, 26; 10:8。車輪は配置があまりに複雑で、ひと目には混乱しているように見えたが、完全な調和のうちに動いていた。ケルブの翼の下にあるその手に支えられ導かれた天上の存在たちが、これらの車輪を推し進めていた。その上、サファイアの御座には永遠の御方がおられ、御座のまわりには神のあわれみのしるしである虹があった。

車輪のように複雑なものがケルビムの翼の下にある手の導きに従っていたように、人間の出来事の複雑な推移もまた神の統御のもとにある。諸国の争いと騒乱のただ中であっても、ケルビムの上に座しておられる方は、いまなお地上の事柄を導いておられる。

それぞれに割り当てられた時と場所を次々に占め、自らはその意味を知らぬままその真理の証しとなってきた諸国の歴史は、私たちに語りかけている。今日のすべての国々とすべての個人に、神はご自身の大いなる計画の中でそれぞれの位置を定めておられる。過ちのない方の御手にある測り縄によって、今日、人々も国々も量られている。すべての者は自らの選択によって自らの運命を定めており、神はご自身の目的を成就するために、すべてを御旨のもとに治めておられる。

偉大なる「わたしはある」がおん言葉のうちに、永遠の昔から永遠の未来に至るまで、預言の連鎖の環を一つひとつつなぎ合わせて描き出された歴史は、時代の行進の中で私たちが今日どこに位置しているのか、そしてこれからの時に何が起こると予期すべきかを教えている。これまで成就すると預言されたすべてのことは、今日に至るま

で歴史のページに刻まれてきており、なお将来に起こるべきすべてのことも、その順序どおりに必ず成就することを、私たちは確信してよい。

すべての地上の支配が最終的に打ち倒されることは、真理の言葉において明白に予告されている。神がイスラエルの最後の王に宣告を下されたときに語られた預言の中に、そのメッセージが示されている。『教育』, 178, 179.

一見すると混乱しているように見えるその複雑な車輪は、諸国民の争闘と騒乱に表される、人間の出来事の複雑な展開である。キリストが御言葉の中で示された歴史は、わたしたちが今どこにいるのかを告げており、そうすることによって、地上のあらゆる支配権の最終的な打倒を明示している。十四万四千人のための印の時は、あらゆる幻の効力が成就するところであり、その歴史の中で、車輪は、キリストが「産みの苦しみの初め」と特定された戦争と戦争のうわさを表している。産みの苦しみの初めは2001年9月11日に始まった。なぜなら、その時に十四万四千人のための印の時が始まり、印を押す御使いが、教会と国の中で行われている忌むべき事のために嘆き悲しむ者たちの上にその印を置くからである。

この地で起こる戦争は、それらの戦争が何を表しているのかを見聞きする者に悲しみをもたらす。封印の歴史は、地上のすべての王国の最終的な覆滅を明らかにしており、そうした王国の覆滅は、過去の預言的歴史の中にたどることができる。イザヤは第六章で、ヨハネ、ダニエル、エゼキエル、ヨブ、パウロと同じ幻を見たとき、その時のためのメッセージを告げることを自ら申し出たが、そのメッセージをどれほどの間告げ続けるべきかを尋ねた。

また私は、主の声を聞いた。「わたしは誰を遣わそう。誰がわれわれのために行くだろうか。」私は言った。「ここにおります。私をお遣わしてください。」主は言われた。「行け。この民に言え。『聞いてはいるが、悟らない。見てはいるが、理解しない。』この民の心を鈍らせ、その耳を重くし、その目を閉じよ。彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟り、立ち帰って、いやされることのないように。」私は言った。「主よ、いつまでですか。」彼は答えた。「町々が住む者もなく荒れ果て、家々に人がいなくなり、国土がことごとく荒れ果てるまで、また主が人々を遠くへ移し去り、この地のただ中に大いなる離散が起こるまで。」イザヤ書 6:8-12

イザヤに与えられた答えは、彼が「地がことごとく滅ぼされる」までメッセージを伝え続けなければならないというものだった。封印のメッセージは戦いの時に与えられ、その戦いとは、預言者たちが皆見た「マラー」の幻の解釈のことだとはっきり示されている。外面的なメッセージは内面的な体験を生み出すように設計されているが、それは「聞こうとする」者に限られる。

第二次世界大戦における教皇権の代理軍であるナチスの結びつきは、行に行を重ねるように、第二の代理戦争における第二の代理軍と一致しており、また第二次世界大戦それ自体も第二の代理戦争と一致している。第二の代理戦争と、いまウクライナにおいて繰り返されつつあるラフィアの国境戦争との結びつきは、2023年10月7日に始まった第三の災いにおけるイスラムの第二撃と地理的に結びついており、それは預言的な車輪の中の車輪を表している。

1999年、ジョン・コーンウェルによって著された一冊の書物が出版された。ジョン・コーンウェルは当時、イングランドのケンブリッジにあるジーザス・カレッジの上級研究員であり、受賞歴を有するジャーナリストであり著述家でもあった。その書物は、第二次世界大戦中に在位したローマ教皇の役割を扱っていた。その書物は、後の教皇の祖父、すなわちピオ・ノーノとして知られる教皇ピウス九世の右腕であった人物から書き起こされている。1849年、共和派の暴徒がヴァチカンの諸施設を襲撃し、教皇ピウス九世はローマ市から逃れた。彼が亡命の途に伴った人物こそ、エウジェニオ・パチェッリの祖父であった。エウジェニオ・パチェッリは教皇ピウス九世の右腕であった人物の孫であり、のちにピウス十二世となった。そして、エウジェニオ・パチェッリを扱ったその書物の題名は『ヒトラーの教皇——ピウス十二世秘史』であった。

本書でコーンウェルは、かつてエウジェニオ・パチェッリ枢機卿であったローマ教皇ピウス十二世が、第二次世界大戦中のナチ政権によるユダヤ人迫害をどの程度認識し、いかに対応したのかを検討している。彼は、ホロコーストを非難するうえでのピウス十二世の公的な沈黙と不作為が、戦時中の彼の道徳性を欠いた指導を浮き彫りにしていることを示している。

コーンウェルは、彼の外交的経歴や当時の複雑な政治力学を含め、ピウス十二世の教皇在位期の歴史的文脈を示している。彼はナチス・ドイツへの対処に関するバチカンの姿勢を検討する。コーンウェルは、ピウス十二世がホロコーストに抗議して公に発言せず、迫害されたユダヤ人のために介入もしなかったと指摘する。というのも、彼は1933年に枢機卿として、カトリックがヒトラーの事業に服従することを約束するヒトラーとのコンコルダート（政教協約）を成立させていたからである。

次回の記事でこの研究を続けます。

第二次世界大戦後、一部のナチス戦犯は、南アメリカの数か国を含むさまざまな国々へ逃亡することによって、裁きを免れることに成功した。彼らが逃亡し、南アメリカへ到達するために用いた主要な方法には、次のものが含まれていた。

ラットライン：ラットラインとは、カトリック教会やそれに同調的な情報機関を含むさまざまな組織によって設けられた秘密裏の逃走経路であり、ナチスおよびその他の逃亡者がヨーロッパから脱出するのを助けるためのものであった。これらの経路では、しばしば偽名、偽造文書、密輸網が用いられ、南アメリカを含む安全な避難先への移送が図られた。

偽造文書：多くのナチス逃亡者は、自らの真の身元を隠し、逮捕を免れるために、偽造旅券、査証、およびその他の渡航書類を入手した。彼らはこれらの文書を用いて、中立国または同情的な諸国を経由して南米へ到達した。

当局の共犯：場合によっては、南米諸国の同情的な当局者たちが、ナチス逃亡者の存在を黙認し、あるいは彼らが逮捕を免れるのを積極的に助けた。とりわけ、ナチス・イデオロギーに共感する権威主義体制を有する一部の政府は、これらの者たちに庇護を与えた。

法の抜け穴：一部のナチス戦争犯罪人は、自らの犯罪について訴追を受けることになるヨーロッパへの引渡しを免れるため、南米諸国における法の抜け穴や緩い犯罪人引渡し法を利用した。

総じて、ラットライン、偽造文書、当局の共謀、そして法的抜け穴が相まって、ナチスの戦争犯罪人たちは第二次世界大戦終了後も南アメリカへ逃亡し、長年にわたって裁きを免れることが可能となった。ChatGPT、2024年3月。